

## 最優秀賞

テレビ神奈川社長賞

### よりそう心

川崎市立有馬中学校（宮前区）

一年 松本慎三

ぼくの祖母はとても強いと思う。小学校から耳が不自由でも今も一生懸命生きているのだから。よく祖母から「元気かな？」と携帯電話の電子メールを受け取る。近くに住む母方の祖母は小学生のときに聴力を失ったため、発音は僕たちとほとんど変わらない。手話ではなく唇の動きを読む、「読唇術」で会話をするので、見ただけでは耳が不自由だということは誰も気づかない。僕も話していて、耳が不自由ではないかのように話を通じる。

耳の不自由な人から見た世界はどんな物だろうと想像してみる。人指し指で両耳をふさいで音を遮断してみた。自分の心臓の音が大きくくひびいている。風の音、車の行き交う音、虫の鳴き声、人々の足音や話す声、テレビから流れる音など、普段よく聞こえていて、あまり

意識して聞いていない音が全くしなくなるとたん、恐怖や焦りを覚え、じわーっと汗が出てきた。人々の口がパクパクと魚のように動いている。何を話しているのだろうか？何で笑っているのだろうか？僕は不安で押しつぶされそうだった。まるでこの世に一人ぼっちになったようで、なんだかとても怖かった。耳の不自由な人の心細さを思い知った。

目の不自由な人は白い杖を持っている。足の不自由な人は車椅子に乗っていたり、盲導犬を連れている。一方、耳の不自由な人が歩いていても気づくことは大体ないだろう。けれど僕が感じたとても不安と恐怖を持ったまま歩いているのだろうと思うと胸がしめつけられるような気持ちがあった。後ろから自転車がベルを鳴らしても、車がクラクションを鳴らしても気づくことが出来ないのは、とても危険なことだ。

祖母があるお店の店員さんに後ろから話しかけられた時、もちろん気づかなかったのだが、その店員さんは無視されたと思ったのだろう、とても不機嫌な顔をした場面を見たことがある。僕が「耳が不自由で全く聞こえないんです。」と言って、誤解を解くことができたけれど、祖母がかわいそうになり僕も悲しくなった。それと同時に、そう思われてしまっても仕方のないことだとも思った。耳の不自由な人たちが一人で行動する時、数えきれないほどこのようなことがあるのだろう。

最近テレビでは字幕がでることが多くなり、病院では筆談で対応してくれる。電子メール利用などでどんどん便利になっている。しかし全ての人にとって居心地の良い社会にするのに一番必要なことは、全ての人が家族や友達だけでなく、全ての人に対する思いやりやより

そう心を持つことだと思う。僕たちは、「どこへ行ってもそこにはハンディキャップを持った人たちがいる。」と考えなくてはならない。それが当たり前なんだとそう意識していれば少しの気づきで、困っている人を手伝うことができる。

ハンディキャップを持った人たちは、実際に助けが必要であっても、見知らぬ他人に声をかけてお願いするのは、難しいことだと思う。僕にできることはあるかな？と気づけた時に「お手伝いしましょうか？」の一言が普通に言える人間になりたい。

僕は祖母の心に寄り添えているだろうか？そう思う時、いつも何気なくしているメールのやりとりも想像以上に大きなものだと気付かされる。今度は僕からメールを送ろう。祖母の静まり返った世界に決して耳からは聞こえない僕の声が響くように。